

「土佐の教育改革フォーラム」（安芸市会場）概要

日時	平成19年2月18日（日）13:30～16:00
場所	安芸市民会館
出席者	教員、保護者、県民一般250名 中澤教育委員 山崎教育委員 河田教育委員 大崎教育長 他事務局職員

1 開会

2 あいさつ（県教育委員会）

3 土佐の教育改革について（県教育委員会）

4 パネルディスカッション

テーマ 「これからの高知県の教育について」

コーディネーター	高知大学教育学部助教授	内田 純一
パネリスト	教育改革10年を未来につなげる会座長団	岩塚 忠男
保護者・安芸市教育委員		石坂 公一
香美市立山田小学校長		明石 俊彦
香南市立赤岡中学校長		宮地 憲一
室戸市教育長		中島仁八郎
県教育委員会教育政策課主任		濱田 陽治

要 旨

内田コーディネーター

前半は、それぞれのお立場で土佐の教育改革10年を振り返って、どのように受け止めているかという点です。

後半は、それらを踏まえて、「高知県におけるこれからの教育はどうあったら良いか」と。「そのためには、こんな取組をしてみたい」「こういうことが重要なのではないか」という点について、それぞれのお立場でお話しいただこうと考えております。

未来へつなげる会の提言書にもありますように、この改革が、さらに一層、県民一人ひとりのものになっていくような、そういったディスカッションをフロアの皆様と一緒に進めていきたいと思っています。

それでは、岩塚さんから順に、「これまでの10年を振り返って」ということでお話をいただきたいと思います。

そして、一回り回ったところで、今度はフロアの皆様に「この10年を振り返って」と

ということで、ご意見やご感想等をいただきたいと思います。

それでは、岩塚さん、よろしくお願いいたします。

岩 塚

平成8年から、私は校長として小学校に勤務をいたしました。当時、私の勤務した下八川小学校は、高知県教育委員会から「児童による授業評価の研究をなさい」ということで研究指定校に指定されておりました。

その時に初めて、私は「児童による授業評価」という言葉に出会いましたし、「それは、どういうことなのか」ということで、平成8年・9年の2ヵ年は、私にとって大事な2年間だったように思います。

その後「第2期の土佐の教育改革を考える会」の委員、あるいは、座長団ということで、高知県が大きく変わろうとしている中に、自分が勉強させていただいたということ、本当に幸せに思っております。

三つのことを、私は思っています。

一つは、「教育というのは、教育委員会に任せておけばいい。学校へ任せちよいたらいいじゃないか」という、そういうような雰囲気、あるいは考え方が、この10年でずいぶん変わったな」ということです。

土佐の教育改革の大きなスローガンというのは「子どもたちが主人公」です。私は、この言葉が今やっと自分の中で少しずつ理解ができるようになりました。「子どもたちが主人公」、考えてみますと保護者も主人公であります。地域の住民の方も主人公だと、私は思っています。学校では教師が主人公です。一人ひとりが主人公にならないと、教育はダメだと。とりわけ、学校における「子どもたちが主人公」という言葉は、私には新鮮に響きました。

二つの大きな観点は、児童生徒による授業評価と、一つは開かれた学校づくりの推進でしたが、その中で本当に大きく変わったのは、教職員の意識だと私は思っています。

土佐の教育改革を私は自分の言葉で表現するならば、「教員あるいは教職員の意識改革である」と、そういうふうに思っておりましたけれども、直接、日々子どもたちに接する先生方の意識が、本当に10年でお変わりになったなということを、現在の職務を通して感じています。

二つ目は、私たちはよく「ゴールイメージ」という言葉を使います。それは「郷土を愛し、そして世界に羽ばたく子ども、心豊かでたくましく、創造性に満ちた子どもをつくりましょう」ということです。これが、土佐の教育改革の目指す子ども像です。

私は、この言葉は素晴らしい言葉だと思っています。高知県の教育は、「みんなで、こういう子どもをつくりましょう。小学校も中学校も、みんなで頑張りましょう」というスローガンを掲げました。

そこで、そのために立場や、イデオロギーや、信条や、思想や、色々な違いのある人が「この目指す子ども像に対してどうなのか?」、「どうすれば、子どもは幸せになるのか」ということを、本当に話し合いをすることができた。この10年間は、まさにそうだったと思っています。

三点目は、いわゆる「教育に対する組織的な取組の振興」であります。

高知県の一つの弱点というのは何かと考えると「組織力」だと思っています。その組織力に乏しかったところの責任のなすり合いが少し弱くなって、「みんなが主人公になる」という取組を始めてきた。

そういう意味で、子どもの教育に関わる当事者意識を一人ひとりが持っていただけになったのではないかと私は考えております。

これからが実践の段階で、いま新たな土佐の教育改革のスタートラインに、立ったのではないかと私は感じております。

そういう意味で、土佐の教育改革は極めて画期的な取組であったと思います。これから、どのような考え方で、どういう視点を持ってやっていくかということを、私たちは大いに考えていきたいと思います。

内田コーディネーター

石坂さん、お願いいたします。

石坂

私は、安芸市の保護者として、土佐の教育改革の中で、やはり、全部の市町村に配置された地域教育指導主事さんの活動がすごくありがたかったと感じております。

いろいろな取組が安芸市でもされました。「ハッピースマイル運動」で、朝、毎月20日頃ですか、日を決めて街頭に保護者や地域の方が立って挨拶をします。

そんな中で、家庭の中であまり挨拶ができてない家庭は、こちらから「おはよう」と言っても、あまりはっきりした挨拶が返ってきません。そのような、何でもないような家

庭の教育力が、これから益々必要になってくると思います。

伊尾木川の上流に別役という地域があって、そこから安芸まで約40kmを歩いておりて来るといった活動もありました。地域の人、保護者、指導主事さんとか、いろいろな方々と一緒に歩いて来ると、いろいろな話もできたでしょうし、何でもない地域の教育力がすごく大事だと思っています。また、地域教育指導主事さんの配置も、よろしくお願いします。

「開かれた学校づくり」によって、学校のこともオープンに私たちの耳に入ってきましたし、私たちも、開かれた学校づくり推進委員会の中に入って「一緒に学校を創っていこう」という意識ができて、大変素晴らしい取組だったと思います。これをまた、後ほど「どういうふうにつなげていきたいか」というお話もさせていただきます。

内田コーディネーター

「一緒に学校を創っていこう」という、こういう意識が保護者の中にずっと広がっているというお話いただきました。

それでは、明石さん、お願いします。

明石

まず、山田小学校に赴任した時に考えたことは、一つは、「山田小学校の教育改革をみんなで一緒に進めていきたい」ということです。

それから県教育委員会や市町村の教育委員会から言われてやる研究ではなくて、子どもの実態から「自分たちが何をしたいのか」ということを話し合い、みんなで力を合わせて取り組んでいきたいということを考えました。

子どもたちの実態の調査や、教職員の話し合いの中で、今まで山田小学校が取り組んできた伝統である「人権教育」「図書館教育」「健康教育」は大切にしていきたいが、「本当の意味で、子どもたちに基礎的・基本的な学力がついていないのではないか」ということが出て来ました。そこで、フロンティアスクールの指定と学力向上拠点形成事業の指定を受けることにしました。

さまざまな子どもの実態があり、学力的な格差も大きい。一人ひとりの子どもたちの思いや願いに、少しでも応えていけるようにということの中で、少人数指導に力を入れて取組を始めました。チームティーチング、課題別学習、習熟度別学習にも取り組みました。子どもの実態によって、やり方は変えていきました。いつも習熟度別学習をしているわけではありませんし、課題別学習をしているわけでもありません。子

どもの実態と単元の内容等によってやり方を工夫しながら取り組んできました。

成果も出て来ています。C R Tの検査結果をずっと残しているんですけども、この10年近い歩みの中では、着実に成果として見えてきていまして、2年生から6年生まで、ほとんどの部分で全国平均を上回る結果となっています。

また一方で、課題も明確になってきています。C判定の子どもが固定化されてきています。そういう学力的に辛い部分を持っている子どもに、どう支援をしていったらいいのか。まだまだ、そういう部分に対する支援が十分であるとは言えません。

また、私たちは基礎的・基本的な学力を、知識面だけで捉えてはいません。子どもたちが、具体的で豊かな体験を通して生きる知恵や喜びを学ぶことを大切にしたいと考えて、地域の方に来ていただいたり、子どもたちが地域へ出かけて行ったりして学ぶことも大切にしてきました。

それから、学校だけでは十分な教育ができない、学力をつけることができない。家庭や地域の協力が不可欠であることが、益々はっきりしてきています。

そこで、「自学自習の手引」や、家庭の方にできる範囲で声掛け、指導をしていた「チャレンジ学力アップ」という手引書も作りました。

また、開かれた学校づくり推進委員会の中で、子どもの願いや思いを地域の方に伝え、できる範囲でそれを叶えていけるように。ただ、安易にすべて地域の方がやってしまうのではなくて、「ここは、子どもたちにもう1回考えて欲しい」というところは、子どもたちにもう一度投げ返す。といった取組を、続けているところです。

まだまだ課題がいっぱい残っていますが、精一杯取り組んできたということだけは言えると思っています。今後も、取組を続けていきたいと思っています。

内田コーディネーター

学校自身が、自ら調べたり、地域の人たちと話し合い、教職員の中から実践を生み出してきた。「だからこそ見えてくる課題もある」というお話だったというふうに思います。

それでは、宮地さん、お願いします。

宮 地

平成9年度から校長として、安芸市の土居小学校で5年間お世話になりまして、次いで3年間お隣の清水ヶ岡中学校でお世話になりました。

平成8年度に「土佐の教育を考える会」が発足しまして、10回ほどの議論がなされました。その時に確かに学力問題をはじめ、学校に対するご批判や、要望がありました。「学校が開かれてない」「学校の情報が全然出ない」というお声もたくさんありました。

平成9年度に新米校長として土居小学校に赴任した時に、「開かれた学校づくりとは、どういうことなのか」ということを考えました。

私は「開かれた学校というのは、保護者あるいは子どもたちが学校経営に参画をすることだ」と考えました。

それから、ずっと地域に「学校通信」をお配りいたしました。近くの公民館長さんをお願いしまして、公民館だよりの裏面を利用させていただいて、毎月1回、5年間ずっと欠かさずに学校情報を発信しました。

その結果、「学校の状況や子どもの状態がよく分かります」ということで、学校のほうにもいろんな情報を寄せていただけるようにもなりました。

次いで学校の内部について、小学校の場合は学級担任制ですので、どうしても学級王国的なものがありまして、組織力を強化する必要を感じ、「学校チームティーチング」という言葉を作りまして、一人の子どもにみんなで教育をする、みんなで関わることに取り組みまして、次の年度に教科担任制を思いきって導入いたしました。

保護者の声を学校経営に、あるいは学校運営に反映させようと思って、子どもと保護者に学校評価も、これは平成11年度でしたが、お願いをして、学校評価を初めて実施したわけです。

その中では、「子どもたちにしっかり学力を身に付けさせて欲しい」ということが第一の要望でした。そこで学力の基になる力、読み・書き・計算を重点的に「どいつ子チャレンジタイム」と名づけ、特に国語と算数の取組を始めたわけです。反響が強うございまして、高知県内の小学校にも広がっているということです。

子どもたちには豊かな心とともに、しっかり生きる力を培いたいと思いました。ちょうど「どいつ子議会」などさまざまな取組をしていく中で、地域の方々がたくさん応援に来てくれるようになりまして、最終的には、その「どいつ子チャレンジタイム」という時間に地域の方が14名ほど来ていただきまして、我々の授業へ参加していただけるようになりました。

次に清水ヶ丘中学校へ赴任をしました。中学生はなかなか学校では勉強をするのですが、家へ帰りますと勉強しません。これは、なんとかしなくてはならないと思いました。

高知県内の中学校はどこもそうですが、学校行事が多いとか、クラブ活動ですとか、さまざまございまして授業時数の確保が大変です。中学校は年間35週として、980時間をクリアしなければならないのですが、授業時間をどうやって確保するのかということが大きな課題でしたので、考えたのが2学期制です。

2学期制を導入いたしたわけですが、これは端的に言いますと、3学期を2つの学期に区切ることによって、中間テスト・期末テストとか、あるいは保護者面談とか、そういったものが1回分減るということで、浮いた時間を授業に充てようという考え方です。

ただ、2学期制といいますが、その制度があったら子どもが伸びるというものではありません。

2学期制は実際のところ、授業時数は40時間とか、あるいは学校によっては30時間くらいしか延びません。私が期待したのは、これを切り口として、学校の教職員の意識を変える。それによって学校を改善するということです。

小学校での学力が十分身に付いてない生徒もいます。中学校のカリキュラムを進めながら、小学校の学力を再度身に付けていくというのは、至難の業です。

そこで小中の連携を考えました。清水ヶ丘中学校は、校区に6小学校がありますので3年計画で2校ずつ増やしていきました。

その内容は、中学校の教員が小学校へ行って授業をし、小学校の先生は中学校に来ていただいて、小学校の時の学力のつまずきをもう1回フォローしてもらおうということです。

これに踏み切る時にもずいぶんと議論がありました。子どもたちに何とかして学力をしっかりと身に付けてもらいたい。自分の希望の進路が生かせるのか、生かせないかによって人生が大きく変わると言っても過言ではありません。

私は赤岡中学校に赴任しまして、みんなの心を1つにしたいということで、開口一番「高知県一の中学校にしよう」と呼び掛けました。

赤岡中学校では、新たに学校評議員制度を導入しました。開かれた学校づくり推進委員会は、小学校では議論して何かをするということは非常にやりやすいのですが、中学校では校区が広がって、一つのことを議論して取り組むというのが、なかなか成立しにくい現実があります。

そこで、地域の願いを学校に反映させていくために学校評議員制度を導入いたしました。

土佐の教育改革の6つの柱がございますけれども、それを学校現場としては咀嚼をし、より子どもたちや地域のニーズに合わせた形でこれまでやってきたというのが実態です。

内田コーディネーター

それでは、中島教育長、お願いいたします。

中 島

室戸市もこの10年間、県の方針に沿う形で取り組んできました。この10年間でかなり変わってきたのではないかと考えております。

例えば、学校を開く度合はかなり増えて、保護者や地域の方々にも学校の動きが、だいぶ分かるようになってきた。

教員の意識もこの10年間にずいぶん変わってきたことを実感しています。特別支援教育についても、「一人ひとりの子どもを大切にしなければならない」ということで、校内研修も盛んになりましたし、就学指導委員会との連携も、自主的に進んできています。

室戸市で特に力を入れて取り組んできたことは学力向上です。保護者の大部分や地域の多くの方々の願いは、やはり「子どもに学力をつけてもらいたい」ということです。

学力は、一生懸命取り組んでも簡単に数値が変わったり、目に見える形で変わってきたというようにはなりません。

土佐の教育改革の1期では、室戸市においても、チームティーチング、習熟度別授業、加力学習など、あらゆる工夫した指導はしましたが、成果が目に見えて上がってきておりませんでした。

そこで、教委としての支援方法を教育研究所に検討させたところ、「先進的な手法

を学ぶ必要がある。低学力を克服する本をお出しになった陰山英男先生や、小河勝先生の手法を真似するところから始めてはどうか」ということになりました。そこで、平成15年に小河先生に室戸市に来ていただきまして、それから毎年、何回か来ていただくようになりました。

小河先生からは「基礎・基本を徹底的にやって、子どもたちにわかる喜びを植え付けていく。そして、つまづいている生徒にはつまづいているところを明らかにして、それに対する指導を加えていく。そういうことが必要ではないか」というアドバイスをいただき、100マス計算やチェックテストについて指導していただきました。

これを教職員が自分の学校に持って帰って、取り組む学校が徐々に増えてきたということです。

こういう取組で「勉強を解りたい」と一生懸命にやる生徒が、どの学校でも増えてきて軌道に乗ってきました。

陰山先生の土堂小学校にも「一度見せて欲しい」ということで、教職員に行ってもらいました。そして、行って見てくると、学んだことから派生させて取組をするようになりました。

音読をしたり、100マス計算をやったりすることによって子どもが変わってきました。子どもが変われば、親もどんどん協力をしてくれます。

三高小学校では、計算とか音読から、「子どもの学力を上げるためには生活習慣から変えなくてはならない」ということに発展し、今、文科省で全国的に展開しております「早ね 早おき 朝ごはん」にも先駆けて取り組んでいきました。

保護者も、「食事もみんなでとるようにしよう」「テレビも子どもが辛抱するのであれば、辛抱しましょう」とか、それから食事のメニューも、「子どもたちのために1品でも増やそう」などと取り組んでいます。

こういう学校が出て来て、周囲の学校にも刺激になりまして、いま、室戸市のほとんどの学校では、基礎・基本の徹底という形で、毎日の授業の中に組み込まれています。

最近になってやっとそれがCRTなどのテストのうえでも好影響を及ぼして、少しずつ形あるものになりつつあります。室戸にとりましては、今がスタートであると思っています。この取組を進めることによって、私は、必ず変わってくるのではないかと思います。

うように考えています。

内田コーディネーター

土佐の教育改革を呼び水にしながら、室戸の中で「学力向上」あるいは「学力とは何か」について研究しつつ、今があるということです。

では、濱田さん、お願いします。

濱田

平成8年、「土佐の教育改革を考える会」がありました。私は「開かれた学校づくり」に挫折した経験があり、「こんなことで何が変わるものか」と思いました。

平成10年、なんと地域教育指導主事になってしまいました。人口3,500人の村で、「学力向上と子どもの生活改善の運動や読書運動(ブックスタート)」をしました。

平成14年に県教育委員会の教育改革の担当になりまして、県内を一生懸命「教育改革」「教育改革」とセールスをして回りました。

改革前から考えますと、開かれた学校づくりは当たり前の言葉になりました。当時の状況を考えますと……と言っても、これは今の話なんですけれども、国の教育再生会議の第一次報告でこういうことが言われています。「教育界の悪平等」「形式主義」「閉鎖性」「隠ぺい主義」「説明責任のなさ」「危機管理体制の欠如」、散々です。

高知県では、ここで言われている状況は10年前に、確かにありました。私は見ております。その中で、もがき苦しんでいました。子どもたちは主人公ではなかった。保護者とは、要求し、要求される関係でした。ジャーナリズムは、警戒すべき存在でした。

この10年間で、確かに変わりました。

ただし、本当に核心が変わったかと。この点において、各学校で実効性を上げているかについての不安は残っております。

「土佐の教育改革総合評価書」を作るためのデータ分析をしまして、どう読んでも、どう分析しても、中学校のさまざまな問題が浮上してきます。これには非常に悩みました。これを出さないわけにはいけません。嘘というわけにはいけませんので出しますと、当然、これをどうにかしないといけなくなります。これは千日手になって、解決不能ではないかなということを考えました。

次に、家庭・地域の教育力の問題が浮上してきました。この2つの問題というのは、非常に困難な問題です。

中学校問題については、教員の責にのみ帰することはできないと私は思っております。「中学校に一体何が求められているのか？」ということから、もう一度議論をなくてはならないと思っています。

ただし、中学校に求められるさまざまなことがあったといたしましても、学校である限りは授業が最も大切な要素であり、「未来につなげる会」でも厳しく指摘をされている「授業を改善する」ということについては、真摯に受け止めなくてはならないと思っております。

家庭・地域の教育力の向上については、「県民的な問題意識から発した土佐の教育改革が、本当に県民運動になったか」という意味でも問題があります。教育再生会議でも「社会総がかり」と言いながらも、具体的な方法論としては「仕事と生活のバランスをとる」という「ワークライフバランス」という言葉しか見えてきておりません。もっと根深い問題があることを考えなくてはいいけない。教育に参加しない層、「来てもらいたい保護者がPTAに来てくれんのです」という、あのお話です。

参加したくても参加できない層の存在も考えなくてはならないと思います。いま、全国的には「給食費未納の問題」、それから、先週のNHKの「クローズアップ現代」で取り上げられておりました「保護者の無理難題の問題」というのが話題になっております。これらも、教育を「与えられるサービス」とのみ考えて、保護者・地域と学校・行政の関係を、「要求する者」と「それに応える者」の関係においてのみ考えるから発生するのではないかと思います。共同参画、共同責任で地域ぐるみ教育が成り立っておれば、こういう問題は発生しないのではないかと思います。

さて、取組方針の核心というのは、5つの視点にあると思います。特に4の「根本的解決」それと5です。5については、「国や社会の動きに柔軟に対応しながら、ゆるぎなく高知県の目指す教育を進める」ということです。僕は、ここが大事なところであると思っています。

いま、「これから、実際、どうしていくのか」という行動計画を作っている最中です。ぜひ、アドバイスをいただけたらありがたいと思います。

内田コーディネーター

今度はフロアの方から、この10年をどう考えてきたかというようなところで、何かご意見やご質問等お願いします。

フロア:男性

最初に県の教育委員会の説明がありましたが、そのことにつきまして、ちょっと...

....

確かに、総花的に羅列をし、見事な提言と思います。しかし、これを実際に実践をしていく場合に、やはり、子どもにしても、先生にしても、あるいは地域の人々にしても、あるいは行政においても、やはり信頼関係がなければ、効果が出ないと思います。

信頼関係を築くためには、子どもも先生も自ら厳しく、誠実な態度でなければならぬということと、もう1つは、相手に対して、これは、あくまでも思いやりの精神がなければ教育の効果はあがりません。

優しさ、愛情、誠実と思いやりの精神が、この提言の中には一言もないではないかと思います。人生哲学というものは、ひとつも謳われていないのではないかということです。

内田コーディネーター

「信頼関係」ということと、「どういう哲学で臨んでいったらいいのか」ということですが、中島さん、お願いします。

中 島

教育で一番大切であるのは信頼関係だと思っています。

学校であれば、当然、子どもと教員の信頼関係です。その信頼関係を築くためには、まず関わるということです。「教師は、親以上に子どもに関わってやる」という熱い思いです。先生に反抗したりとか、言うことを聴かない子どもには、寂しさがあります。どの子どもも先生に認められたい、話を聴いてもらいたいものです。

また、子どもがどういう環境の下で生活を送っているかということを、教師は普段から知っておく必要があります。学校で集中力がない子どもは、家庭でご飯も食べて来ていなかったり、両親の間にトラブルがあって勉強どころではないとか、さまざまな背景があろうと思います。

子ども一人ひとりに毎日声掛けをするように心がけないといけません。当然やっていると思いますが、案外、教師は悪いことをする子どもには声掛けはするものですが、あまり手のかからない、どちらかというと目立たない子どもにはつい抜かってい

ることがあります。そういった子どもも、やはり先生に認められたい。声をかけてもらいたいという思いはあるはずです。

分け隔てなく、みんなに声をかけて励ます。そのような信頼関係を、普段からつづけておかななくては、効果のある生徒指導や学習指導はできないのではないかと思います。

子どもは「自分は、みんなに守られている」、「気をつけてもらっているんだ」という実感が湧いた時には頑張る。子どもの良いところをまず認めてやるということが大切ではないかと思います。

掃除を一生懸命やったとか、友達に親切にしているとか、習字が上手く書けたとか、運動が得意な子どもは、その運動のことを評価するとか、良いところを評価をしてやれば、子どもはやる気を起こすのではないかと思います。

内田コーディネーター

土佐の教育改革は、そもそも信頼関係を失っていたからこそ始めたわけです。それを、どう10年で回復したのかという質問だと思って伺っているわけです。濱田さんお願いします。

濱田

これは、後半の議論のために大切なことを提起していただいたと思います。

信頼関係がなければ、どのような言葉も、システムも、制度も、効き目がありません。この色刷りしているリーフレットの中の3ページに、「提言を踏まえて、県教育委員会は、これから基本的な考え方として……」というところの(1)(2)に「信頼関係に基づく」という表現がされています。

2番目の「取組の目標」に「信頼される学校をつくる」ということが書かれています。

3番の「取組の視点」の1番に「子どもの視点に立つ、現場の視点に立つ、連携の視点に立つ」と書かれています。

これは、すべて「信頼関係」を大切にした考え方です。

信頼関係をつくるためには「誠心誠意」という姿勢も必要ですが、一緒に議論していただいて、課題を共有していただく必要があります。そのためには、情報を開いてお示しして、ご理解をいただくことが必要と思っています。

フロア:男性

提言の中には、「子どもが主人公である」と書かれています。それならば、子どもも厳しくやらないといけません。学習でも、予習・復習をすると授業も面白くなって学習

意欲も湧いてくると思います。

みんなの厳しい誠実な態度というものが、これからの土佐の教育改革の基本ではないかと、私は思っています。

内田コーディネーター

それでは、今から10分間の休憩をいただきたいと思います。

▲▲休憩▲▲

内田コーディネーター

後半は、高知県におけるこれからの教育は、どうあったらいいか、そのために、こんな取組をしてみたい、こんなことを考えているということ、まずパネラーの方から報告していただこうと思います。前半の最後にございました件も含めて、まず石坂さんのほうから順に、濱田さん、そして最後に岩塚さんをお願いします。

石坂

PTA、そして地域の人間の立場としてのこれからの取組、そして先ほどの、信頼関係や優しさについてのご意見に対して、どうしていくかということですが、思いやりとか、優しさとかいうことを、家庭の中から自然な形で教えていく力、教育力を高めていかなければならないと思っています。

「早ね 早おき 朝ごはん」にも取り組んでいます。1日中テレビを見たり、ゲームができる状況の中で、そういうルールを教えるということは、地域と家庭の教育力であると思います。

そんな中で、安芸市ではいま、地域教育推進協議会が家庭教育推進協議会に移行しております。その中で、「早ね 早おき 朝ごはん」の運動の一環として、親子クッキング教室で親子が一緒になって料理を作って、朝ごはんを食べる習慣を作るといこともしています。

このように、前は当たり前前にできていたことが、今は地域と家庭が学校とチームワークを組んでやっていかないと難しいということを実感しています。

先ほどのお話の中にありました、どんな会をやっても出席をしてくれない保護者の方もいるので、そういった方をいかに取り込んで大きく、みんなで進めていくかということが、大きな課題であり、これから進めていかなければならないことです。

明 石

先ほども言いましたが、良いことばかりではなく、さまざまな問題点が出て来ています。特に心配していることとして、不登校の傾向の子どもさん、また、LD、ADHD、高機能自閉症などの子どもさんへの支援や、さまざまな背景の中で、家庭に教育的な支援が必要であると思われる状況もずいぶん増えてきているように思います。どのような支援をしていったらいいのか。悩みが多いのです。

今、香美市は「義務教育の質の保証に資する学校評価システム構築事業」に取り組んでいます。

これは、香美市内の全ての小中学校でそれぞれが自己評価し、外部評価委員にそれを評価していただいて、香美市全体の取組みの評価もしていただく。学校評価に関わる運営委員さんも最終的な評価をしてくれるというものです。

学校はさまざまな取組をしています。それは単に口頭で説明して分かるようなことではないので、かなりの資料も必要です。その準備も大変です。

しかし、そういう中で、さまざまな方が学校に子どもたちや教職員の様子を見に来てくれています。そして、そういう方の中から、「こんなに頑張ってくれゆうがやね」「先生方も大変やろう」と声をかけてくださる外部評価委員さんや、運営委員さんもいます。また、「学校の味方やきね」と、「みんなに知ってもらうきね」という声をかけてくださる運営委員さんもいます。

大変ですが、精一杯取り組んでいることを、地域のさまざまな方が知ってくださり、子どもたちにも気をつけてくださり、「学校と家庭と地域が、みんなで取り組んでいけるきっかけになるのではないか」と思っている部分もあります。

内田コーディネーター

ありがとうございます。

「学校評価」を取り入れる中で、土佐の教育改革の趣旨をより生かしていけることができるのではないかと、具体的なお話だったと思います。

次は宮地さん、お願いします。

宮 地

学校教育の使命は、「子どもたちを健やかに育てる」ということに尽きると思います。そのためには、子どもたちには豊かな心をしっかり持ってもらい、同時にしっかり学力を身に付けること。この二つが非常に重要な課題です。

赤岡中学校で取り組んだことにつきまして、ご披露したいと思いますが、ポスター

を会場の皆さんにお見せください。

これは、一昨年(2017)の8月に作成いたしました。赤岡町と吉川村の官公署はもちろん、スーパーマーケットなどにもご協力いただいて、貼ったものです。

「赤中でみんなの夢が広がる。赤中でみんなの愛がつながる。赤中でみんなの希望が生きる」という、この「夢」「愛」「希望」という3つの言葉を使いまして、「赤中は大きく発展します」という内容です。

この「夢・愛・希望」は、今年から本校の教育目標になっております。

これは、「学校のことを、子どもだけでなく、保護者や地域にもっと知ってもらいたい。関心を持ってもらいたい。赤中のプラス面も、マイナス面も、すべて知ってもらいたい」ということで作成しました。

このポスターには子どもも参画していて、子どもの願いと、我々教員の願いが、その中にマッチしておりますので、非常に上手くいったのではないかと思います。この「夢・愛・希望」を基にしまして、八つの教育改善計画を立てまして、進行中です。

このおかげで、地域の方の学校に対する関心度が飛躍的に高まってきました。学校に来ていただいて、ご意見をいただく場合もあります。その結果、本年度の学校評価では、学校に対する満足度には大変高い肯定感がありました。

教育は信頼なくしては成り立ちませんが、信頼をつくるために学校がすべきことに踏み込まないと、言葉で「信頼」「信頼」と言っても何もできません。

うちの教職員は、徹底して子どもに寄り添っています。問題が起きてもほとんど電話で済ましません。必ず家庭訪問を行います。しかも、親も働いておりますので夜間になります。そして、「この子どもたちをどうしようか」という話をします。

本校の場合は職員間の風通しもいいわけですが、こうやって全教員が一致協力して子どもにあたっていくということが一番大事です。信頼関係を作るには、教師は徹底して子どもに寄り添うこと以外にないと思います。

「今後の高知県の教育はどうあるべきか」ということですが、豊かな心と学力をしっかりと身に付けるために、一つ一つチェックしながら進めていく以外にはないだろうと思います。

予算面も非常に厳しくなっておりますし、これから教員の数が増えるということはまず考えられません。あとは自分たちの英知を集める。地域や保護者を巻き込んで、

協力をさせていただいて子どもたちを育てていく。これしか、ないのではないかと思います。私は、そういった学校づくりをこれからもしていきたいと思っています。

内田コーディネーター

では、続いて、中島さん、お願いします。

中島

この10年間で築いた地域との信頼関係を基にして、これを強化していくということです。子どもたちが変われば、地域も応援してくれます。

室戸では、保護者の生活実態に非常に厳しいものがあります。しかし、子どもたちが変わっていくことに対しては、みんな関心を持っております。協力もしてくれます。

子どもたちの学力向上のために、徹底した、反復練習などを取り入れて、「室戸の子どもは、こんなに変わったよ」と言われるように、みんなで努力をしていきたいと思っています。

方法については、学校の先生も保護者の方も、どんどん出させていただいて結構だと思います。「こういう取組をして、こういう成果と課題が出た」ということを明らかにし、共有していく中で、より良いものを見つけ出していく取組が必要ではないかと思っています。

ここに「翔べ、土佐の子どもたち」という冊子をいただいておりますが、この中に、今後焦点化して取り組まなくてはならないことが提言されていますが、これも参考にしながら、市全体で取り組んでいこうと思っています。

子どもたちの学力が上がってきています。子どもが落ち着いて学習できますと、いわゆる問題行動もグッと減ってきております。室戸の学校では、私が現場にいた時にはできなかったことが、どんどんできております。この1～2年間で、ずいぶん不登校の子ども数も減りました。それから、問題行動もかなり減ってきております。皆無とは言いませんが、深刻な状態はあまり見受けられません。これは、やはり教職員と、地域の方々が協力してやってくれているからだ感謝しております。

中学校での授業についての指摘がありますが、私も中学校教員でしたので、これについては、検証を試みる必要があるのではないかと思います。

中学校では、小学校からの積み重ねで、一朝一夕にはいきがたい問題もありますし、室戸では子どもたちが少なくなり、規模が小さくなって、授業研究をしても、教科の教員が1校で1人しかいないという学校が多いのです。だから、非常に難しい面も

ありますが、乗り越えなければならないと思っております。

そのような点に、今後は力を入れていきたいと思っております。

内田コーディネーター

では、濱田さん、お願いします。

濱田

高知県は、財政的に厳しいです。子どもたちを取り巻く状況も、この10年間、非常に悪化しております。それを、学校をはじめ、保護者・地域の皆さん、教育を支える皆さんの努力によって、ようやく支えてきたという面もあるように思います。

生活保護の実需給人員からはじまって、離婚率、要保護・準要保護の生徒数と、非常に厳しい指標が並んでおります。18歳未満、1人あたり1ヵ月の教科書・参考書購入額119円で全国最下位。ちなみに、東京は1位で494円とか、子どもたちを巡る状況は、非常に厳しい。

しかし、いま室戸の教育長さんが言われましたように、教育を誇れる県、市町村でありたいと私は思います。

いま、初期投資を怠ってトータルコストが上がっている状況であると思います。「初期投資」というのは、愛情と、手間と、少しばかりの資本です。このあたりを一生懸命やっていかなくてはいけないと思います。

さて、教育を誇れる県になるために、授業改善を中心に教育の質を向上させ、子どもの夢を実現し、保護者や地域に喜ばれる教育を目指したい。特に中学校では、教科経営を中心とした学校教育に転換したいと思います。

また、各学校で、それぞれ課題を特定し、子ども・保護者・教員・地域住民みんなで取り組んで、共同参加・共同責任で進める特色のある教育、人を大切にする教育を目指したい。地域に開かれ、保護者に開かれ、教員にも開かれ、何よりも子どもたちに開かれた学校を目指したい。そのためには、開かれた学校づくり推進委員会がカギになると思います。

このように一生懸命頑張って、みんなに喜ばれる教育になったら、「たとえ今日の生活が苦しくても、税金を投入して教育の為に米百俵」ということになっていくと考えています。

内田コーディネーター

この提言を踏まえた方針も県のほうから出て来ておりますし、学校の課題、子どもたちの課題もありますが、教育行政の課題もちろんあるわけです。岩塚さんお願いします。

岩 塚

これからの高知県の教育を考える際に、いま、お手元にリーフレットがありますが、私は二つの前提と、二つの課題というのが、私自身がいま自分で整理ができる点だと思っています。

一つは、「網羅的ではなくて、一点集中主義のほうが良いのではないか」ということです。

もう一つは「私は」「俺は」という時代ではなくて、「連携」の視点に立った教育実践が、これから求められていくということです。

地方分権が進んでいます。私たちが仕事をさせていただいている教育委員会も、広域化の問題が起こっています。教育委員会の力を、もう少し、つけなければならぬのではないかと。小さな市町村の教育委員会の一つの力だけでは、足らなくなってきた。そうすると、お隣、あるいはみんなの教育委員会が広域化をして、力を持っていくということも求められるということです。

また学校教育や地域の中の一環大事な1つのポイントは「連携」ということであり、連携の基本は「相互信頼」です。

私は、連携には二つあると思っています。一つは家庭、学校、地域との横の連携。二つ目は保育所・幼稚園、小学校、中学校、高等学校という縦の連携です。その中で、自分の学校や地域があるという考え方がこれから求められていくと私は思っています。

嶺北地域に、嶺北高校がありますが、少し空き教室がありました。そこで、連携を行っていました中学校が「もう同居しましょう」ということになりました。今年の4月から同居連携型の中高一貫教育校が誕生します。

その形だけでは全国初だということですが、小・中という義務教育段階の連携から、これからは市町村立の義務教育学校と県立学校との連携をも、視野に入れた取組を行っていかねばならないのではないかと。高校教員の専門性を、私たちは日々感じています。学ぶべきことが多々あります。

13歳(中1)の子どもから18歳(高校3年生)までの、異年齢の子ども集団が誕生します。そうすると、また新しい教育活動ができる等々、学力の面、あるいは人間性

の育成の面でも、「連携」へ向けて新しい風穴を開けていきたい。

小中学校の管理職の校種間異動も一つの方法だと思います。私は中学校の教師でしたが、小学校の校長をやらせていただいて、中学校が小学校に学ぶべき点を多く感じました。

二つ目の前提を申し上げます。それは、特色ある学校づくりです。

室戸市の三高小学校は全校30名前後で、全国へ情報発信している学校ですが、この例からも高知県は中山間地域の小規模校が、特色を持っていると思います。それをもう少し発展させていく、それぞれの学校が特色を持つということが、これからの大きな課題ではないかと思っています。

これから規制緩和の方向としても「校区の再編成」など色々なことが起こってくるでしょう。そうすると、学校は選ばれる時代が来るのではないかとということも視野に入れた時に、特色のある学校をみんなで創っていくことが大事になると思っています。

そういう前提のうえでの二つの方法の一つは、「徹底した授業改善」です。これを第一に高知県の教育は取り組むべきだと思います。

誰もが「分かる楽しい授業」といいますが、基本は、子どもが学校へ来て、友達と仲良くできる学級、仲間とふれあう楽しい学校、それが1時間1時間の授業の創造の原点だと思います。

学校へ来て友達とふれあうという体験を学校でこそやらないと、どこでやるのかと思います。それが、まず授業を構想・構成していく最も基本的なことだと、私は思っています。

それから2つ目は、「徹底した開かれた学校づくりを、これから益々進めていく」ということです。

情報を、送るほうと受けるほうの関係から、双方向性がまず一つだと思います。さらに大事なことは、学校運営に地域や保護者をどういうふうにして参画させていくのかということです。

「先生、上手いこといかんかったね。やっぱり、あこがいかざったろうかね」というようなことが、課題が共有化されていく中で「じゃあ先生、次はこれをやってみよう」などと、新しい方向性になってくると私は考えております。

私たちが創る嶺北中学校は、ぜひ、そういう学校にしたいと思っています。職員会に保護者が参画して、協力できるところは協力していただけるような学校。そういう学校を創りたいという気持ちを持っています。

最後に、私は教育というのは、夢や希望を語らないと教育ではないと思っています。

内田コーディネーター

それでは、フロアの方から、今の6人の方のお話を聴いてでもいいですし、それから「これからの高知県の教育をこう思っているんだ」というご意見がございましたらお願いします。

フロア:女性

香美市で教育長をさせてもらっています原と申します。

私は小学校でずっと教員をしておりまして、退職しまして、土佐山田町で6年、香美市になりまして1年、教育長をさせてもらっています。

ずっとお話を聴かせていただきまして、地教委の在り方というものが今日はあまり出なかったのではなかろうかと思って、手を挙げさせていただきました。地教委は、子ども、保護者、教職員、地域、行政の部局、それから県の教育委員会に信頼され、連携しなければ仕事はできないと思ってきました。

岩塚先生がおっしゃったように、私は、特色ある学校づくりを、過去6年間やってきました。その1つが、山田小学校でございます。

地教委がどのように土佐の教育改革に取り組んできたかということについて、香美市になりまして香北町・物部村・山田町と三つの地教委が一つになった中で、「地教委によって力を入れたところは違っておったな」ということはつくづく感じております。

三地教委の特色を調整し、今の香美市に合ったものにしていくことが課題ですが、学校と県教委の間にある地教委はどうしていけばいいのかという議論も、していただき、勉強させていただきたいと思っています。

なお、明石校長が申しました学校評価ですが、させていただいて大変良かったと思っています。外部評価がまだ途中ですが、学校の評価と外部評価委員さんの評価とは違う点も出ています。これは大変ありがたいことですし、また学校間のそれぞれの評価項目の取組の浅さ、深さも分かってきました。また来年も指定を受けますので、皆さんのお力を借りてやらせていただいたことを、他の市町村にも広げさせてい

ただいて、より良い方向にいきたいと思っています。

内田コーディネーター

大変重要な課題です。「地域の基礎自治体の教育委員会は、どうだったんだろう」というところが、まだまだ十分ではないのではないかと思います。
「提言の中では“体制の強化”という言葉は入っていますが」というようなことですが、もし、今のことに关しまして岩塚さんか……、あるいは中島さんはどのように考えてらっしゃるか。

中 島

私は、これからは地教委がどのように主体性を持って関わっていくかということが大切になるかと思っています。

それぞれの地域で、何をいま成さねばならないのかということを的確に把握し、それを地域や学校に協力を求めて成就をさせていくことが大切なことになってくると思っています。

室戸では、まず学力を向上させることが一番のねらいですので、これを続けていきたいと思っています。

その基になるのが、基本の反復練習、これが今、室戸には合っている方法だと私は考えております。

岩 塚

地教委の問題が、私も一番頭を悩ましていることです。まさに、国レベルでも市町村教委のあり方というものが議論されています。市町村教育委員会は、「レイマン」と言われている教育委員によって成り立っています。

教育委員さんの構成にしても、今までは名誉職であったり、長老がなったりというようなことがあったとするならば、選出方法も見直していかなければなりません。

また、教育委員会に課せられた課題は、当然、管理的な面もありますし、指導的な面もあるでしょうが、教育は、単なる教育の人づくりという面ではなくて、実は、市町村における、あるいは県でもそうですけれども、地域づくり・地域興しとタイアップする必要があると思っています。

地域づくりと教育は一体化しなければならない。だから、これからの地教委の大きな課題というのは、いかに地域づくりの課題を、教育の面で具現化していくかということだと思っています。

簡単に言いますと、地教委のこれからの課題というのは、それぞれの市町村の首長さんと教育委員会との密接な連携の中でどうやっていくのかということだと思っています。

内田コーディネーター

ちょっと、もう、残念ながら、時間が来てしまいましたけれども、フロアからのご意見がございましたでしょうか。

フロア:男性

教員の研修のこととか、採用のことなんか意見がなかったですね。生徒に対しての授業も大事ではないですか。研修については、精選し、重複は省くことを考えていただきたいと思います。

それから、いま教員が長期の研修なんかで量販店というような営利企業に行っておるわけですが、営利や効率主義を先生が勉強するというより、高知県は第1次産業が中心ですから、農林水産業に夏休みに研修に行くような研修も必要ではないですか。社会福祉関係なんかへも行っておると聞きますが、それはもちろんやらなければいけません、やはり、第1次産業なんかの研修もやるべきだと私は思います。

それから、高校の先生が小学校へ行く、あるいは中学校へ行くとか、あるいは逆に小学校の先生が中学校・高校へ行くとか、あるいは保育園の研修に行くとか、そういうこともやらないといけないのではないのでしょうか。

それから採用については、10年くらい臨時の先生をやっている方がいると聞く。ところが臨時の先生というのは、普通の先生と同じような日常の教育活動をやって、1学期の終わりの7月に勉強して採用試験に通るといようなことは、なかなか難しいです。

特別に、新採と臨時の先生を分けて採用するということも考えてもらいたいですね。

それから、採用されたら、これは教育センターで1年間研修させたらいいです。裁判官とか検事とか弁護士は、司法修習生として2年間研修します。2年は財政的に厳しいですから1年でもいいですが、徹底的にそこで研修をさせたらいいですよ。そうすると、学校の現場の先生にも迷惑がかからない。あるいは、生徒にも迷惑がかからないではないですか。

それから、安芸市は相撲が盛んでありながら、高校になぜ相撲部を創らないかと

ということです。地域の活性化にもなりはしませんか。

内田コーディネーター

土佐の教育改革の原点であり、これから改めてスタートだということでは、大事な意見をいただきました。

フロア:女性

この教育改革10年に取り組んで、今後、みんなに愛される学校づくり、人を大切にする教育を行うということで、明石先生が前段で言われたことがとても大事なことはないかと思いました。

県から言われて何かをするとか、市教委から何か言われてモデル事業をする。予算がついているから事業をするのではなくて、やはり自分たちの学校の子どもたちに目を向けて、何の課題を抱えているか、希望とか、いろんなことを酌み取って話し合いをし、その問題を解決するためにはどう取り組んだらいいかという課題目標をこしらえ取り組む。子どもが主人公というのは、そういう取り組みではないかと思いました。

そういうことをどこでも取り組んだら、もっと良くなるのではないかということを感じました。

内田コーディネーター

3回のフォーラムの中で、特にこの東部地域の今日のフォーラムの中で、改革がこれからなんだという気運をみんなが持っているということが、確認できたのではないかと考えています。

ではこれで閉じさせていただきたいと思います。

終 了